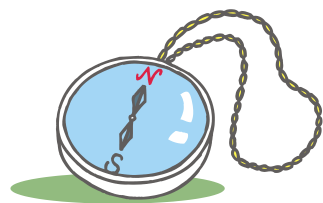


羅 針 盤

第 3 号

令和8年4月20日（月）



◆ 「自律して判断し、行動する」

これからの社会に求められる人材、それは、一人ひとりが自分で考えて、自律的に判断し、動くことのできる人だそうです。統制を整え、計画立てたことが実現できる人が、これまでは望まれてきたことが多かったように思いますが、時代の変化とともに、よりスピード感を持ちながらも、的確な行動ができるといったことが、それぞれに求められる時代となってきています。ここでいう「自律」とは、自分の考えや意思を持って、選択や意思決定を行ったり、行動したりすることを指しているわけですが、「自律的に動く」ためには、自分が成し遂げたいといった思いが原動力となる目標と、その目標を達成するためには、どのような行動を、いつ、どこで、どのようにとるべきなのか、といったことを、あらかじめ決めておくことがとても大事なこととなります。「やろうと思えばできるのだが…」とか、あるいは、「やりたいことはあるがやり方が分からない…」といった状況では、「自律的に動く」ことは困難なことでしょう。そもそも、私たちは一人ひとりが、かなえきれないほどたくさんの願いをもつといわれています。大金持ちになりたい、世界一周旅行をしたい、小・中学校時代に戻って人生をやり直したい、モデルのような体型になりたい、社長になりたい、などなどです。そのたくさんの願いの中から、実現可能な願いを取捨選択し、自らの目標を設定したうえで、行動に移すこととなります。私たちが望むべき状態を目標とする場合、それは自分自身にとって何らかの望ましい価値をもつ必要があります。また、そのことに加えて、その目標を達成できる可能性を少なくとも自分自身は信じられる必要があります。このことを「自己効力感」と呼んでいて、この「自己効力感」が、人が行動を起こす際の重要な鍵となっているそうです。時には、実現不可能な目標を悩みながらも設定してしまうことがあるかもしれません。それでも、自らが設定した目標の実現のために、自らの価値を求めながら、「自律的な行動」とともに、実現できるという信念をもつことが、人としての成長につながっていくのではないのでしょうか。

◆ 「人の話を聴く」

「きく」という漢字は、「聞く」と「聴く」があります。門の中に耳と書く「聞く」は、「門の中から声が聞こえてくる」という意味からできた漢字だそうです。それに対して、「聴く」は、耳の横に十四の心と書きます。では、「十四の心」とは何を意味しているのでしょうか。「聴く」という漢字は、聖徳太子が生きていたころに仏教の影響を受けてできた漢字です。十四の心も仏教の考え方です。それは、広い心で聴く、新しい心で聴く、好意的な心で聴く、明るい心で聴く、共感する心で聴く、素直な心で聴く、信頼する心で聴く、尊敬する心で聴く、温かい心で聴く、平等な心で聴く、誠実な心で聴く、感謝する心で聴く、真剣な心で聴く、美しい心で聴くの十四の心で聴くことを意味しています。人の話は、耳ではなく、心で聴くということ。その際には、十四の心をもって聴きなさいというメッセージが隠されているということです。

